HAL
open science

# “ Ajiashugi to kokueki - Meijiki no Uchida Ryōhei wo rei to shite ” アジア主義と国益–明治期の内田良平を例として

Grégoire Sastre

▶ **To cite this version:**

Grégoire Sastre. “ Ajiashugi to kokueki - Meijiki no Uchida Ryōhei wo rei to shite ” アジア主義と国益–明治期の内田良平を例として . Kindai Nihon to Ajia : chiseigakuteki apurōchi 近代日本とアジア : 地政学的アプローチから, 2016. ⟨hal-01655829⟩

**HAL Id: hal-01655829**

**https://hal.science/hal-01655829v1**

Submitted on 5 Dec 2017

**HAL** is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L’archive ouverte pluridisciplinaire **HAL**, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d’enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

# 3 アジア主義と国益
## ――明治期の内田良平を例として

グレゴワール・サストル

19世紀における欧米列強のアジア進出に際して、日本は自国のあり方を再考する必要に迫られ、明治維新という大きな変革を行った。そこでは、国内の近代化に向けた改革が行われただけではない。諸外国と新しく国交を開くことで、日本は国際社会における自分の立場を常に意識せざるを得なくなったのである。そして、地理的に近い韓国、中国、そしてロシアといった諸国との関係は、戦略的にも大きな重要性を持っていた。

そうした明治の新しい情勢の中で、アジア主義と呼ばれる思想が形成されていく。この論文ではアジア主義そのものについて論じるつもりはないが、第二次世界大戦後の1963年、思想家の竹内好は『アジア主義』という文集の解題で、アジア主義を次のように定義している。

> 「私の考えるアジア主義は、ある実質内容をそなえた、客観的に限定できる思想ではなくて、一つの傾向性ともいうべきものである。右翼なら右翼、左翼なら左翼のなかに、アジア主義的なものと非アジア主義的なものを類別できる、というだけである」[1)]。

竹内の定義は今でも有名なものだが、これでは幅が広過ぎて、アジアのことを述べるだけでアジア主義ということにもなりかねない。アジア主義の多様性を示そうとした竹内だが、日本で形成されたアジア主義の特殊性、あるいはそのイデオロギー化についてはあまり示されていない。日本に関するアジア主義は東洋[2)]という概念と同じく、日本の国益のために作られ

たものである。例外[3]は存在するが、この論文で取り上げる人物の語るアジア主義の言説においては、アジアのことそれ自体が語られているというより、むしろ日本のことが語られているのである。

この思想の発達と関連して、同じく明治時代の初期から、新しいタイプの政治活動家が現れた。いわゆる大陸浪人である。この論文で取り上げる人物は、幕末の時期に反幕府の人間が自称していた「志士」又は「壮士」という名称も使っていた。「士」という文字の使用が、彼らの社会的位置付けを示す。明治の大陸浪人の多くは士族であった。その中でも九州出身の人間が少なくなかった。下級武士出身で明治の新体制に入り込めずに不満を抱く者が多く、彼らは征韓論に賛成し[4]、西郷隆盛が起こした西南戦争で反乱軍に与した。政府軍の勝利によって日本国内の軍事的対立は収まった。しかし、反乱に参加しなかった者たちも、軍事的手段によらず藩閥政府に抵抗し、自由民権運動に参加していったのである。一方で、国内政治は変え難いと認識し、政治活動の自由な可能性を持っていたアジアへと旅立っていった者たちもいた。

この論文では、それら大陸浪人の代表的な一人、内田良平の明治期における活動について、簡単なスケッチを試みる[5]。彼の目的は日本の国益と防衛であり、一生を通して韓国、中国、ロシア、そして満州を舞台に、日本国家のため活動したのである。資料となるのは主に、日本で出版された彼の伝記、あるいは大陸浪人たちの事績を顕彰する目的で編まれた『東亜先覚志士記伝』などである。

## 1　玄洋社と平岡浩太郎の影響

内田良平の思想的根拠を形成したのは若い頃の体験であり、彼の思想は、その後の人生を通じて変わらなかった。彼は1874年2月11日、福岡で内田良助[6]として生まれた。彼の父、内田良五郎は下級の武士だった。良五郎は武術に優れた者として知られていた。彼は福岡の玄洋社[7]設立当時から社員であった。明治政府に反感を持ち、西郷軍として西南戦争にも参戦している。そうした父から息子が影響を受けたことは容易に想像できる。ただ、それ以上に内田良平の思想的形成に重要な役割を果たしたのは、間違いなく彼の叔父、平岡浩太郎[8]だった。





平岡浩太郎は九州の実業家であった。彼は九州の炭鉱の経営によって資産を成し、玄洋社のためにその一部を投じた。彼は頭山満[9]と並んで、玄洋社の創設者の一人でもあった。彼は若い内田良平に影響を及ぼすと同時に、経済的な支援者でもあった。1888年、14歳で内田は平岡の家に引き取られ、そこで玄洋社の思想に触れ、国権論や自由民権運動に影響された。特に国権論が内田の思想の根本となったのである。彼はこの環境で征韓論や西南戦争の話を聞き、政府に対する不信は強まった。ただ、内田にとっては内政よりも、対外関係の方が重要であった。「西力東漸」という概念や欧米列強がもたらした危機感、または欧米化への反感が内田良平の思想の根本的なものだった。

こうした理由で、彼は外交、特に日本とアジア諸国の国際関係に関心を持った。その希望に応え、平岡は内田を東京へ遊学させた。上京した内田は、ロシア語を学習することにした。中国語や韓国語は、ロシア語と違って既に学習している者が多かったので、敢えてロシア語を選んだのである。加えて、この時期のアジアにおけるロシアの地政学的位置が日本の勢力圏と思われた地域に危機を及ぼす可能性は高かったため、内田にとって関心を惹くものであった。もっとも、大陸浪人として彼が最初に派遣されたのは朝鮮であった。

## 2　天佑侠、新たな大陸浪人の誕生

玄洋社はもともと朝鮮に対して大きな関心を寄せていたが、政治状況が朝鮮に向ける関心をさらに強めた。征韓論の失敗以降、日本の国家主義者たちは、アジア、特に朝鮮において中国勢力を排除することを望んでいた。しかし、1884年に金玉均らの開化派による甲申政変[10]が失敗したため、彼らが望んでいた朝鮮の改革計画は一旦頓挫した。

しかし、1894年3月28日に上海で起きた金玉均の暗殺と、同年の東学党の反乱が大陸浪人に活動のチャンスを与えた。内田らの目的は日本と中国を衝突させることだった。朝鮮の内乱を利用して、日清間の戦争が勃発する可能性が十分あると考えたのである。陸軍の参謀本部も、密かに開戦のための工作を大陸浪人に働きかけていた[11]。

当時20歳だった内田は、朝鮮における玄洋社の活動への参加を希望し、

このときは朝鮮から帰国した玄洋社員に会い、また、平岡や頭山の指示を受けたことで、初めて朝鮮に渡ることができたのである。内田の任務は東学党と接触し、彼らを支援することであった。その任務を通じて、朝鮮に関する情報を収集することも目的であった。情報収集は大陸浪人の多くにとって重要な目的だった。後述するように、それは内田の活動にとっても貴重な経験であった。その情報を軍に売ることによって、軍部と浪人との相互支援という関係を生み出したためである。内田と軍部の深い関係は、ここから始まる。内田はそうした情報をもたらすことで、政界や財界との関係も強めた。これらのネットワークを通じて、内田は自分の意見を日本の権力者に直接伝えようとしたのである。

朝鮮では既に大陸浪人のグループが活動していた。後に天佑侠という名称で知られることになる集団の原型で、後に内田もその一員となっている。これは、大崎正吉とその周辺の人物によって形成されていたグループだった。グループの成員となる明確な規定は特になく、ほとんどのメンバーは友人でもともと一緒に活動していた。天佑侠と呼ばれる以前に、大崎らは釜山で法律事務所[12]を設立している。法律事務所の目的は朝鮮に在留する日本人を助けることであった。短期間で事務所は浪人の梁山泊となった。彼らは日本人領事館と連絡を持った。領事は彼らを信用していなかったものの、領事館に勤務していた外交官、山座圓次郎[13]が彼らの支援要請を引受けた。

1894年に東学党の反乱が勃発して、大崎らのグループも活動を東学党と連絡を取ろうと試みた。彼らの計画は、東学党を支援することで日清間に戦争を勃発させることだった。しかし、情報と資金なしに動くことは困難だった。二人の浪人[14]を情報収集に派遣し、大崎は資金と支援を求めるために日本への帰国の途についた。帰国の船が出港する直前に届いた情報によれば、紛争が拡大する可能性は高かった[15]。

大崎は日本で支援者を探す中で平岡と頭山に会い、彼らの支援を得ることに成功した。もともと釜山のグループの中にも、玄洋社などの政治結社と関係のある者は少なくなかったし、玄洋社の目的も、このような活動を支援することであった。支援のため派遣される浪人の一人として選ばれたのが、内田であった[16]。

内田らは1894年6月に釜山に着いた。東学党に出向く前に、彼らに戦闘手





段を提供するために、銃や弾薬の入手を図ったが、失敗に終わった[17]。止むを得ず、東学党員を探し求めに行った。武器を盗む計画が失敗に終わったものの、東学党員と集合する前には金鉱からダイナマイトを盗み出している。

東学党に出向く前に、グループの檄文の作成に伴って、天佑侠という名称が選ばれた[18]。そして7月10日頃に淳昌で東学党の指導者、全琫準と会見した。東学党員は天佑侠の支援を受け取ったようである。『東亜先覚志士記伝』によれば、天佑侠のメンバーは東学党員に対し、ダイナマイトの使用訓練を施した。更に、時機を見て共に京城を占領し、東学党が政権を握ることで朝鮮から中国を駆逐することを提案し、東学党も同意したという[19]。もっとも、東学党が天佑侠に本当に同意していた可能性は低い[20]。

天佑侠は東学党と別れ、中国軍の動向を探りながら京城に到着した。この間、7月下旬には、日本と中国は実質的な交戦状態に入っていた。8月、日清両国が互いに正式に宣戦布告した直後、天佑侠は、日本軍によって中国の勢力は駆逐されると判断し、目的は達成されたとしてグループを解散した。『東亜先覚志士記伝』によれば、彼らは東学党にも連絡を取って情勢の変化を知らせようとしたものの果たせなかったというが[21]、東学党と農民の反乱を見捨てる形となったのは間違いない。初瀬龍平の言葉を借りれば、戦前から「彼らの基本目標は、朝鮮に日本の支配権を確立することであり、《東学軍》を助けることではなかった」[22]。東学党軍はその後、日本軍と衝突して壊滅し、全琫準は朝鮮政府によって処刑されている。戦争勃発後に彼らが行ったのは、日本軍に協力しての偵察活動であった。天佑侠のメンバーは中国軍や朝鮮の地理に関する情報を収集しており、その情報も軍に提供したため、現地においては軍との関係も悪くなかった[23]。ただ、開戦という目的を達成した軍司令部や日本政府にとっては、彼らはもはや用済みの厄介者でもあった[24]。

天佑侠の行動が示しているのは、内田と玄洋社の目的でもある。彼らが目指していたのは反乱軍の支援そのものではなく、日本と中国の戦争の機会を作ることであった。日清戦争において期待される日本の勝利によって中華秩序を打ち倒し、日本の勢力圏を広げることが目的であった。

この時期、内田はまだ後年のような有力者ではなかったが、天佑侠での行動は大陸浪人としての最初の経験として貴重なものであった。現地人を利用するなどといった手段は、その後にも度々用いられることになる。

日清戦争の勃発後、彼が朝鮮ですべきことはなくなり、9月に日本に帰国した。戦後の三国干渉[25]、そして、ロシアによる旅順租借によって、内田の目は再びロシアに向くのである。

## 3　ロシア横断

前述したように、内田は1892年からロシア語を学習しており、その知識を活用してロシアの国際的位置を研究した。内田によれば、当時のロシアは、列強の角逐するヨーロッパやアフリカにおいては膨張的な行動をとることが出来ず、アジア進出がロシアの最後の選択であった。そして、太平洋における恒久的な港の獲得と極東の占領地を広げることが目的である、と考えたのである。この中で、旅順租借や満州鉄道の建設の意味も明確に表れて来る。ロシアに対して内田が抱いた危機感はいよいよ深まった。特に1897年に大韓帝国と改称する朝鮮においても、ロシアが影響力を強めていた。日清戦争直後の三国干渉によってロシアと日本の影響圏は直接競合することになった。内田にとって、ロシア勢力圏の拡大は日本の危機であった。

ロシアに対する危機感を深めた内田は、ロシア情勢についての情報収集のため日本を旅立つ。1895年の8月に長崎を出発し、ウラジオストクに到着して、日本人移民に出会い彼らの支援を求めた。そして、情報収集を行うと同時に、日本がシベリアに進出する計画を考え始めた[26]。

1896年と1897年、内田はロシア、中国、朝鮮間の国境を観察するために大陸浪人を派遣、あるいは自ら視察している。彼の考えは、「将来日本の勢力が朝鮮を掩ふに至りたる場合、此の地方は日露清三国の争地となるべし。先んじて露清を制する道を研究せざる可からず」[27]というものであった。内田が探索したのは極東だけでなく、ロシア全体の横断も敢行している。1897年8月にウラジオストクを出発し、シベリアを横断して、1898年3月にサンクトペテルブルクに到着した。6月にウラジオストクに戻り、その後日本に帰国した[28]。

日本に帰った内田は、東亜同文書院の雑誌『東亜時論』に「露西亜裏面の大欠陥」と題した論文を掲載してロシアでの情報収集の成果を披露している。そこで彼は、ロシアについて、列強とは名ばかりの国と述べた。そし





て、日本がロシアに勝てる可能性は十分あるとも主張している。やがて彼は日露戦争のために力を尽くすことになるが、その前に、孫文との出会いについても触れておこう。

## 4　孫文と中国の革命への支援

1898年の初秋、内田は宮崎滔天の紹介で初めて孫文と会見した。この会見で彼らはアジアの国際的状況について話し合った。ロシアから帰って間もない内田は、周辺に対ロシア戦の必要性を主張していた、孫文にもその計画を話している。内田の考えによれば、当時の中国の一番の問題はロシア・満州や朝鮮への進出であったので、この「露西亜問題」を解決することにおいて中国での革命の利益となり、東アジアの平和への道であると述べた。しかし、孫文はロシア問題への対処よりもまず革命が必要だと述べて、内田の支援を求めた。内田によれば、孫文は内田に次のように述べている。

> 「革命成就の暁は、満蒙、西比利の如きは挙げて日本に附与する」[29]。

日本が満蒙やシベリアに進出することを容認する発言を受けて、内田も孫文の条件を受け入れた。当時彼は次のように述べている。

> 「支那革命の挙げにして日露戦争より先じて起こることあらんか、僕は対露計画を中止して君を支援することとせん」[30]。

但し、初瀬龍平によれば、『東亜時論』で出版された内田の論文では、彼は康有為[31]の清朝における改革路線の方が望ましいと考えていた。内田が孫文を積極的に支援しようとしたのは、1898年、康有為の失敗と亡命後という状況下であった。つまり、内田は孫文を支援することに同意したとしても、孫文の思想に賛成したわけではないということである。内田は中国を日本と同じく立憲君主制の国家にしたいと望んでいた。対して孫文は、中国を共和国にすることを構想していた。朝鮮の時と同様、内田は自分の計画を成功させるために、孫文を利用しようとしたのである。日本の

国益のために、中国を利用する考えであった。

内田と孫文が共同で行うとした計画はフィリピン独立運動の支援であった。この問題について内田に最初に話したのは陸軍の中尉[32]であった。彼が内田にフィリピン独立運動を支援するよう依頼した。『東亜先覚志士記伝』によれば内田良平と平岡浩太朗が辿り着いた結論とは次の通りである。

> 「(…)南方に於いては馬来半島から比律賓群島方面に我が海軍根拠地を得、これを国防の第一線としなければ太平洋の制海権を握り帝国永遠の安全を保する事が出来ぬ(…)」[33]。

そのため、フィリピン独立運動を支援することを決めたのだった。東学党や孫文の時と同様、フィリピンの支援によって内田が狙ったのは日本の勢力を伸ばすことであった。フィリピン独立運動に武器を送るのがこの計画だった。内田と共に参加していたのは犬養毅[34]、宮崎滔天、中村背山[35]、平山周[36]といった面々、そして軍の関係者だった。内田は、平岡浩太郎の弟が石炭商だったので、彼に頼んでフィリピンへの武器輸送のための船、布引丸[37]のための石炭を調達した。

布引丸の出港直後、内田はロシアに戻っているが、ロシアに長くはいられなかった。1989年末に孫文や宮崎滔天からの電報で内田の帰国を求めてきたので、1900年の初めには日本に帰っている。孫文は広州で反乱を起こすことを決めており、計画を内田にも知らせた。内田や宮崎は、九州の炭鉱業界を回り、あるいは東亜同文会の調査費を転用するなどして資金を集めた。内田はまた、義勇軍の指導者となる予定だった 。

一方、義和団事件[38]が間もなく発生するという情報が孫文のグループの耳に届いた。内田にとって、義和団事件は妨害となった。乱に際して欧米列強が軍事的に反応する可能性が高かったからである。李鴻章[39]と孫文の交渉では、内田は孫文の代理人として李側と接触した。他の活動家との接触や、清朝の有力者だった李鴻章との交渉を行なうために、6月から7月にかけてシンガポールへの旅行の途中で上海や香港に止まった。

1900年8月末に、孫文と一緒に上海に赴いた際には、中国革命運動を支援するためという名目で、李鴻章や劉坤一[40]の暗殺を図っている[41]。この暗殺によって、中国が混乱に陥り、反乱が起こしやすくなると考えたの





である。しかし、内田の意図は孫文に知られ、彼の反対で計画は中止された。

孫文の反応に失望した内田は、孫文との協力関係に力を注ぐことを止めた。その理由はまず、中国革命運動の準備が不十分であった。そして、孫文との友情があったとしても、これ以上中国の革命運動を支援し続ける理由がなかった。内田はロシアに対抗し、日本の勢力を伸ばすために孫文を支援したからである。しかし、その時期に義和団の乱を口実に、ロシアが満州での軍事力を増加させた。日本は更なる危機にさらされると彼は感じた。その状況で内田は、中国の革命を実行に移す時間も余裕もないと認識していたのであろう。孫文の活動から手を引いた後は、「露西亜問題」に全力を尽くすべく、政治結社黒龍会を設立した。

## 5　黒龍会の設立と日露戦争への動きかけ

1901年2月3日、東京で創立された黒龍会[42]の名称は、欧米で黒い龍を意味しているとよく間違えられた。もちろんそうではなく、ロシアと中国の間にあるアムール川のことである。初期の黒龍会は特にこのアムール川地域に着目していた。創立時、黒龍会員は59人で、その他に数十人の賛助員もいた。黒龍会の目的は、シベリアや満州、韓国[43]の情報を集め、これらの地域への日本の勢力拡大を図ることであった。特定の目的を掲げて政策決定に影響を及ぼそうとした点で、黒龍会は言わば圧力団体であった。

黒龍会と玄洋社、及びその創立者の一人である頭山満の影響について、Marius Jansenは内田は頭山の操り人形だったと述べている。それに対し、Sven Saalerは、この二つの結社の間につながりがあったとしても、黒龍会は玄洋社の姉妹結社と見なすことはできないと主張している。日本の国益や勢力を守るという基本的な目標は共有していても、二つの結社の目的は異なっている 。メンバーについても、黒龍会には、玄洋社の創立者だった頭山と平岡が入っていたが、玄洋社と関係のない者も多かった。

Sven Saalerにとって、政治思想な立場から見ると、創立当時、「黒龍会は当初「天皇主義」「国体」などにそれほど関心を見せず(…)設立当時の黒龍会にとって、「民権」というテーマがまだ大きなテーマであった(…)」[44]、

が、その後、段階的にその傾向が消え、超国家主義に傾いた。玄洋社も最初は自由民権運動の影響は強かったが、その後段階的に国権論に傾いた。これが黒龍会に反映したかもしれない。

しかし筆者は、正式な姉妹結社ではなかったとしても、内田良平の存在だけで玄洋社と黒龍会の親密性が示されていると考える。黒龍会のトップはもともと、頭山と平岡の許可を得て天佑侠に参加、玄洋社の設立者であった平岡の影響を受け、そしてその父親まで玄洋社の一員であった。内田の行動は十分に玄洋社の思想の影響を表現している。黒龍会全体に影響が貫徹したかは不明だが、内田の思想や行動はその影響を十分に示している。

ロシアの状況を監視するため、黒龍会は満州、シベリア、及び韓国に大陸浪人を派遣した。彼ら大陸浪人は、戦争にあたって情報収集と同時に軍事的任務を果たそうとしていた。黒龍会は圧力団体としても、日本の政界や財界、軍部の権力者に働きかけ、戦争の工作を進めていた。そのために、国際状況に関して収集した情報に関する雑誌や書籍を出版していた[45)]。これらの書籍や雑誌は一般向けというよりも、有力者であるエリート層に向けて書かれたのである。出版部数は少ないものの、黒龍会の影響力は部数に示されているわけではない。

これらの出版物は、もちろんアジア各地の問題を扱っているが、最初に取り上げたのはロシア問題であった。1901年9月に『露西亜亡国論』[46)]が出版された。この本は発禁となって現存しないものの、これに代えて11月に出版された『露西亜論』で、内田はロシアに関する自分の考え方について述べている。彼によれば、日本はすぐに戦争を起こさなければならない。時間がたてば、ロシアは鉄道を開通させて、満州に駐留するロシア軍を増加させる恐れがあった。

1902年の初めの時期、黒龍会と内田のロシアへの態度は一変して戦争より交渉を求める態度をとったが[47)]、それは長続きしなかった。変化の理由は、1902年1月30日に締結された日英同盟である。この同盟によって、ロシアとの交渉力が増大し、外交によって問題を解決する可能性を感じたことによるものであった。しかし、1903年11月には元の開戦派に戻っている[48)]。1903年に韓国を旅していた内田は、ロシアの韓国での影響力が強まったと感じ、帰国して黒龍会の会議を開いた。この会議で内田は、外





交の時期が終わったと述べ、平岡の紹介で参謀本部の次長の児玉源太郎に会い、シベリア鉄道などの破壊工作を提案している。もっとも、このときには参謀本部は内田に資金を出すことを断った。

1904年2月10日に日露戦争が勃発すると、黒龍会も戦争に協力した。会員は通訳として、あるいは情報収集[49)]のために敵地で活動した。黒龍会が提供した情報[50)]は日本軍にとって有益であり、軍は黒龍会に資金を与えた[51)]。

1905年8月の講和会議の前後には、日本政府の依頼に応じて、内田も講和に向けた世論工作を行なっている。1905年9月5日にポーツマス条約が締結された。戦後には第二次日韓協約も締結されて、韓国は日本の保護国となった。やがて行われる併合の最後の段階でも、内田は重要な役割を果たすことになる。

## 6　日韓併合

日露戦争以降、日本は韓国で勢力を確立していた。内田にとって、韓国問題には二つの選択があった。完全独立か、完全併合である。そのため、彼は保護国化という政府の方針に批判的であった。望ましいのは明確な選択だった。内田によれば、保護国関係では不十分であり、日本の防衛のため、弱い韓国を併合することは避けられなかった[52)]。内田にとって、韓国人は被支配者で日本は支配者であった[53)]。Marius Jansenによれば、内田は「日本帝国のエージェント」[54)]であった。

1906年12月、黒龍会の会議で内田の主幹としての地位が改めて確認され[55)]、そして組織の戦後方針が決められた。満州を獲得することがその方針であるが、そのための韓国の役割は無視できなかった。満州やシベリアを獲得するにもまず韓国が必要と考えられた。また，中国の政治的な混乱が朝鮮や満州に波及するのを防ぐ必要もあった。1906年2月に統監府が設立され、初代統監は伊藤博文に決まった。玄洋社の有力者である杉山茂丸[56)]が伊藤に対して内田良平を嘱託に薦め、内田は伊藤に随行して1906年2月1日に韓国に赴いた。内田によれば、伊藤が自分のことを受け入れた理由とは、韓国にいた浪人を操ることができると考えたからである[57)]。だが、内田は自らの本当の目的を明確に示さなかった。彼が考えていたこ

とは韓国の政治団体、一進会[58]を利用して、併合を実現することであった。

内田がまず接触した一進会のリーダーが、元東学党員の李容九[59]である。もう一人のリーダーは、日露戦争中に日本のスパイを務めた宋秉畯[60]である。日露戦争中、宋は日本のスパイとなった。1904年10月、この二人によって一進会が創立された。一進会は戦争中に日本軍を支援して人手や情報を提供した団体だったので、内田と関係が深まるのも自然であろう。李が内田に会った時、宋は警察に逮捕投獄された。李は宋を釈放するため、内田に支援をもとめた。宋を出獄させると一進会を自由に操れる可能性も高まると考えた内田は、伊藤と相談して宋を出獄させた。更に、内田は李と面会して、アジアの状況や樽井藤吉[61]の『大東亜合邦論』[62]における日韓合邦について話し合っている。だが、合邦論を唱え、樽井の大東[63]国を信じる一進会会員と違い、内田が望んでいたのは大日本であった。宋を自由にした後、内田が一進会の参事官となった。彼は一進会のため、資金を獲得し一進会への影響を深めた[64]。

内田の計画は、韓国皇帝が退位して日本国天皇に支配者の座を譲ることだったが、これが韓国国民によって行われることで、韓国内あるいは国際政治上の緊張を避けられると考えていた。高宗が1907年7月に第二次ハーグ万国平和会議に二人の密使を送っているが、これが政変のきっかけとなって、一進会は高宗の退位をもとめた。7月の18日に高宗[65]は退位[66]、高宗の息子[67]が大韓帝国の皇帝になった。

この状況を利用して1907年7月24日に第三次日韓協約が設立され、韓国に対する日本の指導力は一層強まった。8月1日、韓国軍は解散され、無職になった韓国軍人の多くが日本に対するゲリラ戦を始めた。内田や宋、李らも襲撃対象となったが、内田はゲリラ活動の動機を過小評価した。初瀬龍平によれば、韓国人が抵抗していたのは保護制度の枠内の取り扱いではなく、保護制度そのものであり、外国から支配されることそれ自体だったが、内田には韓国のナショナリズムに気づくことができなかったのだった。

この時期から、内田は日韓併合に向けた動きを一層強め、杉山茂丸を通じて山県有朋[68]や寺内正毅[69]、や桂太郎[70]らに動き掛け、これによって伊藤博文や日本政府に圧力を掛けようとしたのである。伊藤に対して内





田は批判的[71]だったが、内田によれば、伊藤も自分の考えに賛成であった。1909年2月27日に伊藤が「日韓の合併は、君等の意見に同意する」[72]と述べたともいう。ただ、それはあくまで内田が主張するものであって、実際は怪しい。伊藤に失望した内田は、1908年1月には辞任を申し出ている[73]。実際の辞任は1年後の 1909年2月となったが、それ以後も彼は一進会の助言者として併合のために働き続けた。

1909年10月26日の伊藤の暗殺は、日韓併合に向けた事件の最終段階の一つであった。伊藤の暗殺を利用して、一進会は韓国皇帝や総理大臣、また日本の統監に併合を提案した。この提案の目的とは、各指導者に圧力を掛けることだった。提案を作成したのは内田と黒龍会の会員[74]であったが、一進会に提出させた理由とは、韓国人の自発的運動だという体裁を取るためである。1910年8月29日に併合条約が締結され、9月13日に一進会も解散した。ただ、政府にとっての内田は既に利用価値もなくなっていた。1909年12月23日に内田は韓国から退去させられた。

内田は一進会を利用して併合計画を進めた。そして日本は完全に韓国を支配することに成功し、内田も自らの目的を達成したのである。内田にとって「合邦の事は天命」[75]であったので、併合後、彼は韓国に対する支配について意見書を提出し続けた。

## 7　辛亥革命

1911年に起きた辛亥革命は、明治期における内田良平の最後の活動の機会となった。「ロシア問題」と「韓国問題」が解決した後、内田の目は自然に「中国問題」と「満州問題」に向いた。内田名義の論文『東亜事務弁』によると、日本の経済的状況と軍事的状況にとっては、中国問題の解決が必要であって、しかも、中国の独立は日本によって決定されるものであった。また、内田にとって孫文の望んだ共和制は中国では不可能であった。前述したように、彼は日本と同じ立憲君主制の方が望ましいと考えていた。

中国革命運動への支援は、様々な形で表れた。1905年8月20日に中国同盟会が設立されたが、設立式が東京の内田の住居で行われたことに示されるように、内田は同盟会を支援し、資金を提供した。1907年、清国政府は孫文の引き渡しを求めたが、内田らの日本政府への働きかけによって、孫

文は無事に日本から出国した。この時期から黒龍会と内田良平が中国に集中した。1908年4月に漢文で書かれた雑誌『東亜月報』が刊行された。この雑誌の目的は「日本の精神を以て」「四億の支那人を教えむと欲す」[76]というものであった。1907年から1908年まで、内田は日本に滞在する中国革命運動家に圧力を掛けた日本政府に対して内田は批判を加えている。1911年10月10日武漢で勃発した辛亥革命の際に、日本政府に清国政府への支援を中止させようとして、山県有朋と桂太郎という有力者に動きかけたが、うまく行かなかった 。一方で、内田は中国革命運動に際し、軍から中国革命運動家に武器を提供させた。そして、政府から孫文に資金を提供させようとした[77]。こうした活動は、日本企業が中国における商業や鉄道または鉱山などの利権を獲得することが目的でもあった。

結局、辛亥革命後に権力を握ったのは、孫文ではなく袁世凱だった。内田は中国革命運動や日本政府に様々な働き掛けを行ったにもかかわらず、自分の目的を実現するための影響力が不十分であった。袁世凱を信頼していなかったので、袁世凱と交渉中であった宋教仁[78]に、交渉を中止させようとしたが、これも失敗した。こうして、内田は中国革命運動から身を引いた。彼らに影響を及ぼすことが出来ないと考えたからかもしれない。

大正期以降も、アジア各地に対する内田の活動は続いた。特に、満州における日本の勢力圏を確立することが主な目的であった。そして、彼はまた日本の内政に関心を持ち、大正期の民主主義や自由主義に反対した。1931年には、日本国民への影響を強めるために、大日本生産党を創立した。

## 結論

明治が終わってからも内田良平の活動は続いたが、彼の目的は変わらなかった。内田は常に日本の国益を追求した。日本を国権主義から軍国主義へ導いた一人であり、若い頃から国権主義の影響を受けて、その思想は終生まで変わることはなかった。

内田の思想において、日本とアジアの関係はある定点に基づいている、この定点は日本であった。端的に言うならば、彼が様々な活動を行った理由は、それが日本の利益を守る、または増加させるためだったからである。活動を続けるため、彼は政界や財界、軍部とのつながりを作り上げた。彼





らに情報を提供するのと引き換えに資金などの支援を得た。そのため、内田は彼らを利用したのだが、内田もまた利用されていた、政府が提供した支援は彼を利用するためでのものであった。彼はまた、多くの人々と集団に対して自分の理想とする政策を提言したが、その影響力は強くはなかった。例えば彼は袁世凱に対する支援に反対したが、政府をそのように動かすことはできなかった。

この論文が述べてきた内田の行動は端的に要約すると、次のようになる。若き日の内田は天佑侠と共に、清国との戦争で中華秩序を打ち倒すために活動した。次に、日清戦争直後の三国干渉とロシアの東アジア進出によって、ロシアとの戦争が避けられないと感じ、ロシアを横断して情報を収集した。この時期、孫文と会って対ロシア戦略のため中国を日本の友好国にしようと図ったが、孫文と革命運動は内田の期待に応えず、内田は協力の情熱を失った。一方、内田が求めたロシアとの対決は日本の勝利に終わり、戦後には韓国併合のために活動した。朝鮮を獲得した後は更に、満州や中国における日本の影響圏を固めようと図っていく。

内田にとって、アジアは日本の国益のための器であった。これは日本のためにアジアを利用しようとするものであり、彼の「アジア」には実はアジアは存在しなかった。「西洋覇道の走狗」になるか、「東洋王道の保護者」になるかと、孫文が神戸の講演[79]で問おうとした言葉は内田には届かなかった。内田の理想は、アジア諸国を支援する日本より、これらを支配する日本であった。彼にとってアジアを「導く」という意味は、日本がアジアそのものになること。言い換えれば日本のためにアジアを否定した。もっともこれは、日本がアジアの利益のために力をつくし、欧米列強からアジアを守ったと単純に彼が信じていたからかもしれない。連帯は日韓併合のような、軍事力による支配によるものではなく、平等と自由に基づくべきものであることを理解していなかったのである。

参考文献
葦津珍彦『大アジア主義と頭山満』（葦津事務所、2005年）。
上村希美雄『宮崎兄弟伝完結編』（創流出版、2004年）。
内田良平文書研究会編『内田良平関係文書』（芙蓉書房出版、1994年）。

内田良平文書研究会編『黒龍会関係資料集』(柏書房、1992年)。
内田良平研究会編著『国士内田良平――その思想と行動』(展転社、2003年)。
Eri Hotta, *Pan-Asianism and Japan's war 1931-1945*, Palgrave Macmillan, New York, 2007.
石瀧豊美『玄洋社・封印された実像』(海鳥社、2010年)。
韓相一『日韓近代史の空間――明治ナショナリズムの理念と現実』(日本経済評論社、1984年)。
北一輝・大川周明・満川亀太郎『アジア主義者たちの声〈下〉(入門セレクション)』(書肆心水、2008年)。
吉州牛著、清藤幸七郎編『天佑侠』(新進社、1903年)。
玄洋社社史編纂会編『玄洋社社史』(葦書房、1992年)。
黒龍会編『黒龍会三十年事歴』(黒竜会、1930年)。
黒龍会『東亜先覚志士記伝』上巻、中巻、下巻(原書房、1966年)。
黒龍倶楽部編『国士内田良平伝』(原書房、1967年)。
初瀬龍平『伝統的右翼内田良平の研究』(九州大学出版会、1980年)。
Saaler, Sven «The construction of regionalism in modern Japan: Kodera Kenkichi and his "Treatise on Greater Asianism"(1916)», *Modern Asian Studies*, Cambridge University Press, 2007.
Saaler, Sven「大正期における政治結社――黒龍会の活動と人脈」(猪木武徳編著『戦間期日本の社会集団とネットワーク――デモクラシーと中間団体』NTT出版、2008年)81-108頁。
SAALER Sven and K. J.Victor, *Pan-Asianism in Modern japanese history*, Routledge. London, New York, 2007.
酒井哲哉『大正デモクラシー体制の崩壊――内政と外交』(東京大学出版会、1992年)。
趙軍『大アジア主義と中国』(亜紀書房、1997年)。
関川夏央「大陸浪人と軍事探偵」(『文学界』48(6)、1994年)。
滝沢誠『評伝内田良平』(大和書房、1976年)。
竹内好『アジア主義』(現代日本思想大系9、筑摩書房、1963年)。
頭山統一『筑前玄洋社』(葦書房、1977年)。
頭山満・犬養毅・杉山茂丸・内田良平『アジア主義者たちの声〈上〉(入門セレクション)』(書肆心水、2008年)。
原暉之『シベリア出兵――革命と干渉1917-1922』(筑摩書房、1989年)。
中村武彦ほか監修・内田良平研究会編著『国士内田良平――その思想と行動』(展転社、2003年)。
長谷川義記『頭山満評伝――人間個と生涯』(原書房、1974年)。





松本健一『竹内好「日本のアジア主義」精読』(岩波現代文庫、2000年)。
宮崎滔天・萱野長知・北一輝『アジア主義者たちの声〈中〉(入門セレクション)』(書肆心水、2008年)。
Marius Jansen, *The Japanese and Sun Yat-sen*, Harvard University Press, Cambridge,1954.

註

1) 竹内好『アジア主義』(現代思想大系9、筑摩書房、1963年)12頁。
2) Stefan Tanaka, *Japan's orient: rendering Past into History,* University of California press, 1993.
3) 宮崎滔天はそうした例外の一つであった。
4) 1873年
5) フランス語及び英語によるこの論文の原文は、これらの言語圏に内田良平について紹介することを目的としていた。
6) 幼少期に甲と改名し、更に1902年に良平と改名した。
7) 1881年に創立。
8) 1851-1906年
9) 1855-1944年
10) 甲申政変／1884年12月4日
11) 黒龍会『東亜先覚志士記伝』(上巻、原書房、1966年)144頁。
12) 前掲註(11)同書、147頁。
13) 1886-1914年福岡生まれ。
14) 武田範之(1863-1911)と柴田駒次郎(1866?-1895)。
15) 前掲註(11)同書、171-172頁。
16) 前掲註(11)同書、176頁。
17) 前掲註(11)同書、194頁。
18) 前掲註(11)同書、207頁。
19) 前掲註(11)同書、221頁。
20) 初瀬龍平『伝統的右翼内田良平の研究』(九州大学出版会、1980年)42頁。
21) 前掲註(20)同書、261頁。
22) 前掲註(20)同書、261頁。
23) 前掲註(20)同書、239頁。
24) 前掲註(20)同書、43頁。
25) 1895年4月23日、ロシア、ドイツとフランスの干渉によって遼東半島から日本勝利兵の引き上げを求めた。
26) 前掲註(20)同書、44頁。

27）内田良平『硬石五拾年譜――内田良平自伝』（葦書房、1978年）33頁。
28）中村武彦ほか監修・内田良平研究会編著『国士内田良平――その思想と行動』（展転社、2003年）80頁。
29）前掲註（20）同書、56頁。
30）前掲註（20）同書、56頁。
31）1858-1927年
32）長野義虎
33）前掲註（11）同書、631頁。
34）1855-1932年
35）1854-1929年
36）1870-1940年
37）布引丸は1899年7月21日に旅の途中で嵐によって積み荷もろとも沈んだ。
38）1899-1901年
39）1823-1901年
40）1830-1902年
41）Sven Saaler「大正期における政治結社――黒龍会の活動と人脈」（猪木武徳編著『戦間期日本の社会集団とネットワーク――デモクラシーと中間団体』NTT出版、2008年）82頁。
42）前掲註（41）Saaler論文、82頁。
43）1897年に朝鮮から大韓帝国に国号を変更したので、以下では韓国の名前を用いる。
44）前掲註（41）Saaler論文、84頁。
45）出版した雑誌は次のようになる、『会報』（月刊）1901年10月に第一号が出版された途端に禁止された。『黒龍』が1901年から1903年まで、及び1907年から1908年まで出版された。『東亜月報』が1908年4月から1908年9月まで出版された。『内外時事月函』が1908年8月から1911年11月まで出版された。『亜細亜時論』が1917年から1921年まで出版された。『The Asian Review』が1920年から1921年まで出版された。
46）内田が全文書いた訳ではない。この本は日露戦争を支持しすぎて禁じられたため1901年11月に『露西亜論』のタイトルで再出版された。
47）きっかけに「日露協会」が創立された。
48）1902年4月に設立した中国とロシアの間の満州還付条約が一つの理由であった。
49）前掲註（20）同書、86頁。
50）「征露案内」と「満韓新図」
51）参謀本部と外務省が資金を与え続けた、出版された物の最初の800部を





買っていた。
52）前掲註（20）同書、97頁。
53）前掲註（20）同書、97頁。
54）Marius, Jansen, *The Japanese and Sun Yat-sen*, Cambridge, Harvard University Press,1954, P.128
55）小川平吉と近江谷栄が黒龍会の幹事であった。
56）1864-1935年
57）宮崎滔天・萱野長知・北一輝『アジア主義者たちの声〈中〉（入門セレクション）』（書肆心水、2008年）227頁。
58）内田によれば一進会員は100万人であった。実際に会員数は10万と4万人の間。
59）1868-1912年
60）1857-1925年
61）1850-1922年
62）樽井藤吉『大東合邦論』（1910年）
63）樽井藤吉が日本と韓国の合併から想像した新国家。
64）6ヶ月間毎月2000円と軍から10万円。
65）1852-1919年
66）退位の日にデモが行われて内田の名が出て来て、彼の死を求める為に。一進会の雑誌の印刷所が破壊された。
67）純宗 1874-1926年
68）1838-1922年
69）1852-1919年
70）1848-1913年
71）内田にとって伊藤の反対は韓国の独立を守るべき勅語があったからである。頭山満・犬養毅・杉山茂丸・内田良平『アジア主義者たちの声〈上〉（入門セレクション）』（書肆心水、2008年）232頁。
72）前掲註（71）同書、233頁。
73）前掲註（20）同書、105頁。
74）元老からの意見ももらったこの提案では「併合」より「合邦」と言う単語が使われていた。
75）前掲註（71）同書、241頁。
76）前掲註（20）同書、128頁。
77）1912年に交渉が行われた。
78）1882-1913年
79）「大アジア主義講演」1924年11月28日神戸で行われた。